

三商レポート

第四十四話「思いやりの心」

(株) 三商 内藤 雄

「天声人語」に東洋大学が全国から募集した「現代学生百人一首」に入選した作品が紹介されています（平成 20 年 1 月 15 日）。

「ほうれん草のおひたし最近水っぽい握力落ちた母の細腕」（高 3・千葉 幸）

「仲間とのそば打ち語る父の顔白髪頭の少年がいる」（高 3・馬場史織）

「おじいちゃんみんなの話題と違うけど私はちゃんと聞いているよ」（高 3・岸友佳里）

「帰るねと言ったら急に話し出す祖母の顔見てまだいようかな」（高 3・内田菜月）

「おばあちゃんさっきも言ったよその話忍びよる影そっと肩抱く」（高 3・関口亜沙実）

いずれも高校生の作品です。家族に向けられた優しい目と思いやりの心が伝わってきます。うれしくなります。なごみます。そして、まだまだ捨てたものじゃないと安心しました。その心そのまま大人になってもらいたいと願います。

大人の世界でもなごむ話に出会いました。

相続研修会が終わったあとの酒の席での H さんの話です。「女房の実家の土地の時価は、2 億円はします。相続分は 4 分の 1。女房の姉が母と同居し介護をしています。姉が大変だから私はもらわないつもり、と女房が言うんですよ。」

同席していた一同が次の言葉を待っていると「うちの奴、すごいでしょ」と。皆がうなずきました。奥様は介護の大変さと姉への感謝と思いやりの気持ちを込めて言ったのでしょう。確かに「すごい」です。親の介護を全くしなくても、相続になれば権利だけは堂々と主張するケースが多いのですから。同時に、奥様の気持ちを受けとめ、女房を「すごい」と褒める H さんもすごい。「4 分の 1 は権利があるんだぞ。オレもその金があると助かる。子どもにもまだ金がかかるし。」と言ってもおかしくないからです。連れ合いの横槍が相続を争いにすることも多いのです。

この H さん夫婦のように、感謝の気持ちと譲る心を持っていたら相続でもめません。H さんの家庭が幸せで、H さんの周りに多くの人が集まるのもうなずけます。こうした親を見て育つ子ども、きっと優しい思いやりの心を受け継ぐのだと思います。

(2008. 2. 4)